

日本の誇る蕎麦食文化を届けたい

“Tokyo Soba Meister Kanrinmaru” サンフランシスコ蕎麦打ちの旅

江戸ソバリエ・ルシック 平林 知人

サンフランシスコの街じゅうが、桜が満開で見ごろを迎えた。

さあ、蕎麦咸臨丸乗り組み員16人のサムライ胸高鳴るのを抑えて、眼下にゴールデンゲイトを見渡せる瀟洒な白亜の建物の日本総領事館公邸に、軽やかに足を入れた。



【サンフランシスコ総領事公邸】



【16人のサムライ達】

グラビアから飛び出て来たような大和なでしこ美人の長嶺総領事夫人が私たちを満面の笑みで出迎えてくれる。蕎麦打ち、つゆ作り、厨房作業等、決めた役割りをそれぞれ手際良くこなし、ハイライトの一つ、“蕎麦打ちイベント”会場に臨む。総領事の軽妙な挨拶の後、颯爽と寺西女流名人のデモンストレーションが多くの好奇の青い眼が光る中で始まる。解説は講談師風ほしひかるさんが名調子で添える。熱気の中、蕎麦切りの飛び入り参加も交え和気藹々と進む。いつ顔を見せるか、カルフォルニア州知事のあのシュワちゃん？・・・待てどついで姿みせず。



【寺西女流名人のデモ】



【蕎麦切りの飛び入り】

まあ、いいか！。越前おろしそばを主役に、その脇にはてんぷら、刺身、南蛮漬けなどの和食ツマミが所狭しと彩る。フランスを凌ぐと評判の人気のナパワイン、日本の銘酒誉れ高い“瀬祭”も並び雰囲気を感じ。何処まで繊細なそば風味が彼らの味、嗅覚琴線に触れたのかは正直良く解からない、が、青い眼の質問の多くは“どこでこの美味しいそばを再び食べられるの？”にはストレートで真面目な質問ではあるだけに、即座の答えに窮す。“いっそサンフランシスコ郊外で栽培したら如何ですか、そば打ち道場でも開いたら如何”とその質問を冗句で返すしかない。



【老人ホーム “KOKORO”】

次は日系老人ホームを訪問し、“祖国日本の“ほんもの蕎麦”を味わってもらいたい“押しかけイベントである。日本の香りをおもてなしの心を添えて受け取ってもらいたい一念で、一所懸命心込めて打った。会場では飛び上がらんばかりの喜ぶ姿を拝見してとても心地良かった。

さて第3弾のミッションは、ジャパントウンのホテル”KABUKI“で開催される、なんと43回も重ねてる”さくら祭りのレセプション“会場で蕎麦を振る舞うイベントだ。



【さくら祭り会場にて】

凜と締まった空気の漂う我らのデモブースを、妖艶で清楚な香り漂うさくら女王候補者や、日系人等が好奇の眼で取り囲む。歓喜の声や激励、感謝の言葉等一つ一つ打ち手の心に響くものがある。最後に大きな感謝状も戴いた。又機会を見つけて、アメリカ市民の皆様に“日本の蕎麦の心”をお届けできればいいなと思う。3大ミッションを無事やり終え胸をなでおろす。誰かが呟く。“蕎麦(Buckwheat)が在る日本に生まれてよかったな” 同感！

余談ですが、日程多忙の合い間を縫って、咸臨丸乗組員が眠るコルマの日本人墓地への墓参や、早朝のアルカトラス島刑務所巡り、市内名物ケーブルカーのステップ乗車体験、又日が落ちてネオンが眩しい、極ありふれたスポーツ居酒屋でバッファロー肉やターキー肉をほうばったり、シスコの夜を存分に楽しんだ。最終日の休日は有名なナパ、ソノマバレーへ足を伸ばし“Opus One”での試飲やコッポラー監督所有のあの有名なワイナリーでちょっぴり高級な赤ワインを口に含みながら、ワイワイがやがやと仲間同士の情報交換やたわいない会話をし、乗組員同士の交流を楽しんだ。又どこかで逢いましょう。

Kanrinmaru チームを代表して記す

(『江戸ソバリエ倶楽部通信』No.13 より転載)